

# 1月22日(火)～2月20日(水) 満月セレクト

— 今回のセクター ご紹介 —

Music Selector : ピーター・バラカン

1951年ロンドン生まれ。ロンドン大学日本語学科を卒業後、1974年に音楽出版社の著作権業務に就くため来日。現在フリーのブロードキャスターとして活動、「Barakan Beat」インター FM、「ウィークエンド・サンシャイン」NHK-FM、「ライフスタイル・ミュージアム」Tokyo FM、「ジャパノロジー・プラス」NHK BS1、などを担当。著書に『ラジオのこちら側で』岩波新書、『200CD+2 ピーター・バラカン選 ブラック・ミュージック アフリカから世界へ』学研、『わが青春のサウンドトラック』光文社文庫、『猿はマンキ、お金はマニ 日本人のための英語発音ルール』NHK出版、『魂(ソウル)のゆくえ』アルテスパブリッシング、『ロックの英詞を読む』集英社インターナショナル、『ぼくが愛するロック名盤 240』講談社+α文庫、『ピーター・バラカンの音楽日記』集英社インターナショナルなどがある。

## 今回のセレクトCD

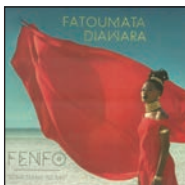
1.



**Jean-Philippe Rykiel & Lansiné Kouyate / Kangaba-Paris** (Buda / 260307)

フランス人のピアニスト、ジャン・フィリップ・リキエルとマリ人のバラフォン(アフリカ式マリンバのような打楽器)奏者ランシネ・クヤテの2人だけによる静かながら刺激的なデュエットの音楽です。互いの文化に興味を持ったヨーロッパとアフリカのミュージシャンが軽い気持ちでセッションをしたという印象のもので、最近このアルバムはドライブの良き友にもなっていますし、食事時のサウンドトラックとしても実に心地よいです。

2.



**Fatoumata Diawara / Fenfo (Something To Say)** (Montuno / 3355752)

ファトゥマタ・ジャワラは西アフリカのマリ出身、俳優から歌手になった30代の実力派女性ヴォーカリストです。保守的な社会の中で思っていることをはっきりと表現する彼女はこの2作目のソロ・アルバムで以前の伝統に則ったサウンドを少し広げて、主に西洋的な楽器編成でカッコよく聞かせます。メロディックな曲に様々な人間関係に関する真面目な歌詞が多く、とても印象に残る作品です。

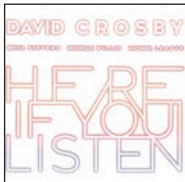
3.



**Joan Shelley / Joan Shelley** (No Quarter / N0Q053-2)

たまたまウェブで読んだちょっとした紹介記事から興味を持ち、オンラインで聞いてみて即購入したこのアルバム。主人公ジョーン・シェリーはアメリカ南部ケンタッキー州の30代前半の女性です。タイトルからデビュー作かと思っただけで5枚も出していた彼女は淡々と物憂げに、フォーキーな曲を歌います。音楽的パートナーでギタリストのネイサン・ソールズバーグの演奏はジョーンにぴったりと寄り添って、落ち着いた安堵感が魅力です。

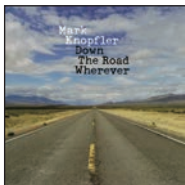
4.



**David Crosby / Here If You Listen** (BMG / 538429532)

初期のバズ、クロスビー、スティルズ&ナッシュなどで知られるデイヴィッド・クロスビーは70代後半で声も衰えず、どんどん新作を発表する勢いに溢れています。若い女性シンガー・ソングライター・ベカ・スティーヴンズとミシェル・ウィリス、そしてスナーキー・パピーのマイケル・リーグとの協力で作ったこのアルバムには豊かなメロディと素晴らしいハーモニーが満載。彼の代表作になることは間違いありません。

5.



**Mark Knopfler / Down The Road Wherever** (British Grove / CDVX 3214)

スタジアムをいっぱいにするバンドに発展したダイアー・ストレイツの解散から30年以上が経ち、その間にマーク・ノブラーが作ってきた音楽はむしろライブ・ハウスが似合うような控えめなものです。眩くような暖かみのある歌、土臭さを感じられるゆったりしたサウンド、決して派手ではないけれど独特なトーンを持った流ちょうなギター・プレイ、どのアルバムにも共通するそのスタイルはこの新作でも変わらず健在です。